

塩津港遺跡（長浜市西浅井町塩津浜）は、その名前が示す通り、古代から栄えた港を中心とした遺跡です。

発掘調査は、港として利用された大川の河口あたりで行いました。その結果、見つかったのは港ではなく、当時港に入りする船が目にしたはずの平安時代の神社でした。これまで発掘調査で新たに神社が見つかることはほとんどありません。神社として思い浮かぶのは鎮守の森に覆われた静寂な空間と本殿や拝殿の建物、そして鳥居でしょうか。では平安時代の神社はどのような様子だったのでしょうか。

塩津港遺跡は、琵琶湖を目前にした河口にあるということもあり、遺跡は1層以上堆積した砂と琵琶湖の水でパツクされていました。このことが幸いして、平安時代の神社がそのまま残されていたのです。

それは琵琶湖を正面にした神社で、本殿・拝殿そして鳥居などの施設が建っていたことがわかりました。さらに、当時の人々が神に託した思いを残す数々の遺物が出土したのです。

注目を浴びたのが「起請文木簡」と呼ばれる大型の木札です。身長ほどある長いもので、300点あまりが出土しました。

当時、神様は恐ろしい力をもつもの信じられていました。人々を守護する一方で、災いをおこし疫病を流行らせるなど、崇りをもたらずものとして、畏敬の念をもって祭られていました。学問の神様で知られる北野の天神さんもかつては雷を自在に操り、京の町に災いをもたらす神として恐れられた神であり、それを鎮めるため北野に祭られたものです。起請文木簡では、そんな恐ろしい世界中の神々にたいして「魚を一巻も取りま

塩津港遺跡



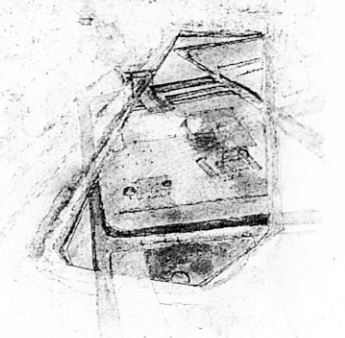
せん」とか「米をなくしません」などという誓いの文句が記されています。さらに誓いを破るようなことがあったならば、体中の八万四千の毛穴から神罰を受けます、と書いてあるのです。

こうした内容から判断して、この神社を信仰し、起請文木簡を納めたのは、琵琶湖水運に携わる運送業者だったようです。当時の社会秩序、とりわけ運送時の信用や秩序を、神の威光をもって獲得し

保っていた一面を見ることが出来る資料です。

木簡は神社を囲む堀の中に納められていたのですが、その多くに刀傷が入られています。これはどういう意味なのでしょう。約束を破ってしまつてその戒めのため傷を入れられたのでしょうか。

この意味はこれから研究していかねければならないのですが、どうも、そうではなさそうです。何百人も神罰を受ける人がいれば、社会秩序は成



り立ちません。おそろく、約束を破つたのではなく、恐ろしい神様との契約には有効期限があり、起請文の期限が切れましたよ、効力が無くなりましたよ、と神様に判るように入れたものと考えられます。今も古いお札を神社に納めるように、効能切れの木札を神社に持ってきて堀に納めたのではないのでしょうか。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 横田洋三）

塩津港遺跡の発掘調査区の全景と、見つかった神社の復元図（右）。神社は、5層四方の堀に囲まれ、本殿・拝殿・鳥居が一列に並んでいたことが判明した

神への畏敬示す木札多数